

猫を看取る経験の構造的把握

赤川学¹⁾, 山浦晴男²⁾, 祐成保志¹⁾, 井口高志¹⁾, 税所真也¹⁾

1) 東京大学大学院人文社会系研究科 / 〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1

2) 千葉大学大学院看護学研究院 / 〒260-0856 千葉県千葉市中央区亥鼻 1 丁目 8 - 1

E-mail : akagawa@lu-tokyo.ac.jp

2024 年 3 月 5 日受付、2024 年 6 月 3 日受理

■ 要約

2023 年、猫の飼育頭数は過去最大となり、猫を看取る経験が今後増加することが予測される。人間や動物の看取りに関する既存研究では、看取り当事者を支援する専門家の役割が強調されており、またペットの喪失体験におけるリアリティ分離やペットロスからの回復過程も注目されている。これを受けて猫社会学の一部である本研究では、猫を看取る体験の全体像を構造的に把握するために、2021 年 7 月から 10 月にかけて猫に関心を有する 48 名の調査対象者に看取り体験に関するインタビューを行い、これを質的統合法(KJ 法)に基づいて分析した。インタビューデータを分析した結果、猫を看取る経験は、【飼う躊躇】、【衝動飼い】、【猫の家族化】、【モノ化する悲しみ】、【自然に還る死】、【消えない悲嘆】、【悔いなき看取りと死の受容】という 7 種類のシンボルマークに整理できた。このうち【飼う躊躇】や【猫の家族化】は、人間や他のペットを看取る際にも共通する要素であり、【自然に還る死】は猫の看取りに固有の経験、【モノ化する悲しみ】は猫を含めたペットの看取りに固有の経験ではないかと考察した。また【消えない悲嘆】が【悔いなき看取りと死の受容】に転化する条件として、「動物医療グリーフケア」における「新たに迎え入れる別の個性を尊重する」という原則が重要であると考察した。

[キーワード: 猫、看取り、質的統合法、シンボルマーク]

..... ヒトと動物の関係学会誌、Vol.68 51 - 59 (2024)

Structural Understanding of the Experience of End-of-Life Care for Cats

Manabu AKAGAWA¹⁾, Haruo YAMAURA²⁾, Yasushi SUKENARI¹⁾, Takashi IGUCHI¹⁾, Shinya SAISHO¹⁾

1) Graduate School of Humanities and Sociology, The University of Tokyo / 7-3-1 Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-0033 Japan

2) Graduate School of Nursing, School of Nursing, Chiba University / 1-8-1, Inohana, Chuo-ku, Chiba-shi, Chiba, 260-8672 Japan

E-mail : akagawa@lu-tokyo.ac.jp

Received : March 5, 2024 / Accepted : June 3, 2024

■ Summary

In 2023, the number of domestic cats was the largest ever, and the experience of end-of-life care for cats is expected to increase in the future. Existing research on human and animal end-of-life care emphasises the role of professionals who support the end-of-life parties, and also focuses on reality disjuncture in the experience of pet loss and the process of recovery from pet loss. In response to this, this study, which is part of cat sociology, interviewed 48 survey participants with an interest in cats from July to October 2021 about their end-of-life experiences in order to gain a structured picture of the overall experience of end-of-life care for cats. The interview data was analysed using the qualitative synthesis method (KJ method), and the experiences of end-of-life care for cats were categorised into seven symbol marks: [Hesitation to keep], [Impulse keeping], [Familiarisation of cats], [Grief of becoming non-living objects], [Death returning to nature], [Grief that will not disappear] and [End-of-life care and acceptance of death without regret]. Of these, we consider that [Hesitation to keep] and [Familiarisation of cats] are elements common to end-of-life care for humans and other pets, while [Death returning to nature] is an experience unique to end-of-life care for cats, and [Grief of becoming non-living objects] is an experience unique to end-of-life care of pets, including cats. When considering the conditions under which [Grief that does not disappear] can be transformed into [End-of-life care and acceptance of death without regret], the principle of 'respecting the individuality of another newly welcomed' in 'veterinary grief care' was considered to be important.

[Key Word : Cat, End-of-life care, Qualitative synthesis method, Symbol mark]

..... Japan. J. Hum. Anim. Relat, Vol. 68 51- 59 (2024)

■ 1. 序論

2023 年、猫の飼育頭数は約 906.9 万頭で過去最大となったと推計されている[1]。前年に比べて約 20 万頭増加しており、これに伴い、人間が猫の終末期を介護し、看取る経験（以降、「猫を看取る経験」）は今後増加することが予想される。

「看取る経験」のなかでも、ターミナルケアやエンド・オブ・ライフケアと呼ばれる、人間の終末期患者の見取りについては、福祉学、看護学、死生学等の分野で活発な研究が行われている。その全貌を見通すことはこの小論では難しいが、質的研究においては、看取られる当事者だけでなく、看取りを行う介護者（当事者の家族を含む）の悲嘆経験や、彼らを支援する医師や看護師ら専門家の役割が主題となっている。たとえば小林・森山は、在宅で親や配偶者を看取る介護者が死別前に感じる「予期悲嘆」を、死別への先行不安、別世界に生きる感覚、やり場のない病気への恨み、死を悼むスピリチュアルな喪失感、調整役割の重圧感、身体的負担・不安感など「広義の予期悲嘆」と、切り離せない自責の念、家で看取ることの肯定感などの「看取りがもたらした情緒体験」に分類している[2]。また丸山・太湯は、介護老人保健施設の看護職員がターミナルケアを実践する上での困難を、医療処置の限界と麻薬使用への不安、状態変化や胃瘻造設判断の難しさ、多床室における生死共存の難しさ、介護職員の不安と職員の労働負担感を見極める困難、後悔しないケアを家族とともに築く困難などに分類し、そのような困難にもかかわらず看護職員が多職種間協議によってケアの質を確保し、その人らしい自然な看取りの実現を試みとした[3]。林・正木らが分析した、高齢者の臨死期に看取りケアを行う熟練看護師のナラティブからは、臨死期の兆候、余命を見極める難しさ、看取り場所に関する家族や患者の希望を叶える困難などを抱えながらも、医師や家族と情報共有し、最善を尽くす看護師の実践が描かれている[4]。さらに矢野・小林は、エンド・オブ・ライフケアにおける超高齢者の療養場所の意志決定支援に関して、熟練看護師は、超高齢者や家族への理解の追求、超高齢者や医療者側からみた最適医療のすり合わせ、本人の尊厳の尊重、希望療養場所の実現可能性など支援を行うと指摘している[5]。このように、看取りを支援する専門家の役割に関する研究は豊富に存在する。

他方、動物（ペット）を看取る経験に関するアカデミックな研究は、相対的に希少である。ただし英語圏では、獣医師ホスピスの役割として、動物の苦痛を軽減したり、事前に計画を策定する形で、看取り介護者の支援を強調する論文[6]、介護者の意志決定を支援するために獣医師が果たすべき医学的・非医学的な役割を重視する論文がある[7]。また、動物

を死にゆく患者として捉え、動物の食欲が減退し、飲食を拒否したとき、動物が何を感じ、何を望むのかについて複雑な語彙が必要だとする論文[8]、動物を一人の人間として扱うために、動物の感情や認知を科学的に把握し、動物の主観的経験に注意を向ける必要性を論じる論文など[9]、患者としての動物自身の意識に対する関心も高まっている。

さらに看取り後に生じるペットの喪失経験（ペットロス）について、二階堂・安藤・梶原は研究動向を詳細に検討しているが[10]、特に社会学の新島典子は独自の視点を提供している。たとえば飼い主と周囲の人々の間でリアリティが分離したり、周囲の人が飼い主のリアリティを封殺することによって、ペットロスのつらさが強化されると論じている[11]。また喪失体験からの回復について、喪失の悲嘆を個人が対処すべきとする「個人モデル」から、周囲や他人が回復を支援する「社会モデル」への移行が生じる中で、喪失対象の代替（不）可能性への認識が、当事者と周囲の人々の間で齟齬が生じる可能性を指摘している[12]。さらにペットロスからの「回復」を「その動物との別れが揺るがぬ事実であると認め、動物のいない現状を受容できる状態」と定義し、悲しみを言語化するナラティブ・アプローチや、葬送儀礼や動物医療グリーフケアによる悲嘆の緩和に注目している[13]。なお現代日本のペット葬儀において、ペットの意味が穢れや復讐に燃える魂といった観念から、家族の一員や精神的伴侶へと変化したという指摘もある[14, 15]。

本論文は、現代社会における猫と人間の関係の深化を理論的・実証的に検証する猫社会学の一部として構想されており、人間の看取りやペットの喪失体験一般ではなく、猫を看取る体験の全体像を構造的に整理し、把握することを目的とする。それゆえに、猫を看取る経験以前に生じている猫との相互作用やそのプロセスについて、広く知ることを試みる。と同時に、猫を看取る経験が人間や他のペットを看取る経験と何が共通しているか、あるいは猫の看取りに固有の経験とは何かについて検討する。この目的を達成するために、人間が猫を看取る際にどのように感じ、何が生じるか、さらにその経験がその後の人生にいかなる影響を与えるかを、半構造化インタビューによって聞き取り、これを質的統合法（KJ 法）にもとづいて体系的に分析し、構造的に把握することを目指す。

■ 2. 方法

1) インタビューの調査対象者とデータ収集方法

2021 年 7 月から 10 月にかけて、筆者のひとり（赤川）を筆頭とする研究グループ 36 名が、スノーボール・サンプリングによって猫に関心がある人 48 名に対して半構造化イン

タビューを実施した。調査対象者の属性は調査者の家族、友人、知人からなる。性別は男性 17 名、女性 22 名、不明 9 名（調査者の意向により記載せず）であった。また年齢層は 10 代が 1 名、20 代が 21 名、30 代が 6 名、40 代が 2 名、50 代が 7 名、70 代以上が 2 名、不明が 9 名（調査者の意向により記載せず）であった。

事前に同意書「猫と人間に関する社会調査・ご協力のお願い」を手渡し、面接時間は 1 人につき 1 時間程度とした。計 10 項目の質問を用意し、調査対象者に承諾を得て IC レコーダなどに録音し、逐語録（トランスクリプト）を作成した。このうち「飼い猫を看取った経験はありますか。ある場合、差し支えない範囲で、そのときどう感じたかを教えて下さい。ない場合は、猫を看取ったときにどうなりそうか、想像で構いませんので、教えて下さい」という質問に対する自由回答を分析データとした。調査対象者のなかには飼い猫を看取った経験がない人も含まれるが、さまざまな人々の経験や心情を聞き取ることを重視するため、検討の素材とした。調査の実施にあたり、東京大学文学部社会学研究室・社会調査倫理委員会に研究計画書を提出し、承認を得た（受付番号 202101, 2021 年 7 月 2 日付）。

2) データの分析方法

分析には質的統合法（KJ 法）を用いた。この手法は、KJ 法の創始者である川喜田二郎によって発案されたもので、山浦晴男が長年の KJ 法の実践・指導を通して、発展的に継承した手法である[16]。それは「事例のもつ個性・独自性を把握しつつ、事例に内在する論理を抽出・発見する」手法であり、猫を看取る体験を体系的に分類するのに適している。具体的には自由回答から得られた逐語録のなかから、一つの意味内容のまとまりをもつ 80 字から 150 字をそのまま抜き出すか、冗長な表現を修正して記述した。最初の段階では 291 枚のラベルが作成され、筆者一同が重要な問題、知らない領域ほどより多くのラベルを用いて活かす精選法[16]の精神により 91 枚を選び出し、分析の対象とした。

続いてラベルを机上に並べて、ラベルが訴える志向性が似ているもの 2～4 枚を寄せ集め、複数のラベルがもつ共通の志向性を一枚に表現した表札を作成した。第 1（A）段階では、すべてのラベルをもとに 30 個の表札を作成し（A001～A030）、そこで第一段階で 30 個の表札と 4 枚の一匹狼を用いて第 2（B）段階の表札 13 個を作成した（B001～B013）。第二段階で 13 個の表札と 3 枚の一匹狼、第 3（C）段階では 7 つのグループに集約した。そのグループに対して、各ラベルの内容を凝縮した表現であるシンボルマーク（グラウンデッド・セオリー・アプローチの「カテゴリー」に近い）

を【事柄：エッセンス】の形で表した。以下、筆者らが作成した表札を<>、インタビューの語りを「」で示す。インタビューの語りのなかの（ ）は、筆者らによる注記である。表札ならびにラベル文頭の数字はデータの管理番号を示し、発言後の（ ）内には発言者の管理番号と年代・性別を示している。

さらに 7 つのグループの関係を視覚的に構造化する空間配置を行なった。そのうえで、空間配置に現れた論理的関係を文章として叙述化した。

次節では、各シンボルマークについて記述する。

3. 結果

1) 7 つのシンボルマーク

第一のシンボルマークは、【飼う躊躇：猫を飼うにはお金や手間の面で高いハードルがあり、飼うことへの躊躇が生まれる】というものである。細かくみると、<(B008) 猫を飼うにはお金や手間がかかるので、飼いたくても飼えない>という表札と、<(B010) 猫の命を預かる責任は重いものであり、それを考えると、猫を飼うのをためらう>という表札に分けられる。

(B008) は、経済的・環境的・心理的条件が理由となって生じる躊躇である。具体的には「(35) すごく難しいのは都心のマンションでペットを置けるところは結構家賃が高くなっちゃうんですね。私にまだそれだけ稼ぎがない」(15:40 代男性)と経済的条件を理由とする語り、「(85) ペット NG の避難所ばかりだという話は聞くから、有事の際のことを考えると、飼いたくても飼えない人、いるみたい」(30:20 代女性)、「(11) 旅行のたびに、ちょっと面倒臭いですね。1 泊だったら、ギリ行けるんですけど。トイレとかも、ご飯とかも全部、多めにしていくみたい。2 泊とかないと、ちょっと誰かに見てもらわないといけない」(4:30 代男性)と、災害時や旅行時に猫を連れていけないという語りがある。

他方、(B010) は、猫を飼育する責任の強さから生じる躊躇である。具体的には「(88) 飼うってことはやっぱその命を背負う重みがあるから、そこのと多分重みが違う」(37:30 代女性)と命を背負う重みに言及する語り、「(31) そういうの（筆者注：猫が亡くなって悲しくなること）を考えたら、やっぱり自分は猫を飼いたいとは思わない」(13:20 代女性)と、看取りの悲しみに由来する躊躇が語られる。さらに「(34) 本当にこのコロナ禍で、人生って、いつどうなるかわからないんだっていう死生観の変化もあると。生き物の命を預かる責任、というか重さを感じて、なかなか（筆者注：猫を飼うことに）踏み切れない」(15:40 代男性)と、新型コロナウィ

ルスの流行以降の死生観の変化が言及されることもある。

第二のシンボルマークは、【衝動飼い：可哀想な野良猫や捨て猫を、やむにやまれず衝動的に飼ってしまう】というものである。細かくみると、＜(B009) 捨て猫や殺処分になる猫がいたら、やむにやまれず飼うことになる＞という表札と、＜(A023) 野良猫や捨て猫は飼われる前から、恵まれない環境にあった＞という表札に分けられる。

(B009) は、眼前にいる猫の境遇を思う語りである。具体的には、「(38) (筆者注：猫を飼うと) 決めたのは親だけど、まあ多分ペットショップで買うことはなかったなとは、今でも思うかな。多分1代目の子が捨て猫だったってのもあって、そういう子を飼おうかみたいな話はあったんじゃないかな」(16:20代男性) と、もともと捨て猫や保護猫を飼おうという意志があったとする語りや、「(10) 多頭飼いする人って、飼うつもりはなかった人も多いから。たとえば、もうどこにも連れていけなくて、殺処分とかになったら引き取るかもしれない、反対を押し切り(笑)」(4: 30代男性) と殺処分を回避するため、否応なく飼うとする語りがある。

(A023) は、飼われる前の境遇に思いを馳せる語りである。具体的には、「(63) 飼ったときにまだ生後3ヶ月位だったんだけど、そのときに、もともとその歳で親元から引き離されちゃってるわけじゃん。だからその時点でもう十分かわいそうなんだ」(38:20代女性) と、親元から引き離された悲哀に言及する語り、「(87) 配達のパイクが、お母さんが面倒を見ていた猫を轢いて、その場で死んで。それを見ていて、すごい私が愛情を注いだ猫ではなくて、私が顔だけを覚えている猫みたいな感じだったんですけど、死んだのを見たら泣いてしまった」(35: 20代女性) と、不慮の事故を目撃した悲しみに言及する語り、「(89) ちっちゃいときに兄弟とじゃれ合ってた遊んで、これぐらい噛んだら痛くてダメなんだなとかっていうのを学んでいく。それをなくして育っちゃってるから、ハリーが凶暴になったりするのそれはそれ(筆者注：育った環境)もあるかもしれない(い)」(38: 20代女性) と、飼われる前のストレスフルな環境を想像する語りなどがある。

第三のシンボルマークは、【猫の家族化：猫は対等な家族の一員であり、猫の死は人間の家族並みに悲しい】というものである。細かくみると、＜(B004) 猫は成長の早い成熟した知的存在であり、人間が1人のときには対等な話し相手になる＞という表札、＜(B005) 猫は子どもや兄弟、父母や祖父母のような存在であり、猫の死は、家族の死並みに悲しい＞という表札、「(41) 看取るとしたら、どうしようもなく悲しいと思います。祖父・祖母・父・母が亡くなるのと同じような感覚だと思います」(23: 20代男性) というラベルからなる。

(B004) は、猫の知能やコミュニケーション能力の高さに着目する表札である。具体的には、「(8) 1人で飼ってたときのほうが話しかけますね。だから、人間に話しかけるように話しかけてたんですけど、今はあんまり。彼女とかいると。『なんでこんなことすんの、お前』みたいな、そういう話しかけ方はしますけど、『今日、なんとかってあつてさ』みたいな話しかけ方は、最近はしてないですよ」(4: 30代男性) のように、一人のときに猫に話しかけるという語りがある。また「(84) ベースとして猫と人が対等、なんなら人間の方が下のように捉えているのかも。猫の動画を見て可愛いと思うのは万人がやることだけど、猫好きの人って猫の性質、中身も含めて好きと言っている人が多いから、猫を対等な生き物として扱う人が多いのかもしれない。だからこそ猫に知性を見出すのかもしれない」(28: 20代男性) と、猫と人間の対等性もしくは人間の劣位性に言及する語りである。

(B005) は、猫は成熟が早いために、最初は子どものような存在だが、やがて老親のような存在になるという表札である。具体的には、「(17) 自分が小さいときは、兄弟とかに近かったのかもしれないですけど、遊び相手でもあったので、自分が大人になってからはもう子どもですね」(7: 30代女性) と、兄弟から子どもへと意味が変化したという語り、「(43) 死ぬ前の猫は本当は老いていて、おじいさんおばあさんなんだろうと思うけれど、どんなに老いても自分が保護してお世話してかわいいと思える存在という意味では自分の子どもみたいなものでしょうからねえ。おじいさん、おばあさんを看取ったと言うより、自分の子どもを看取る感じなのかあ」(25: 40代女性) と祖父母と子どものどちらなのか意味が揺れる語りがある。また「(80) 人間の家族は寿命通りに死んでいけば普通問題ないけれど、猫は大切な家族なのに絶対に自分より早く死ぬし、子どもが自分より早く死ぬのと同じってことだから、これはもう多分しばらくは立ち直れないくらい深い悲しみにくれるだろうと思います。考えただけで悲しくなります」(25: 40代女性) と、高い確率で自分より早逝する猫を思う語り、「(13) 猫との別れを咀嚼して、清算して、受け入れることができないまま別れることになるという、場合によっては自分の親が死ぬよりも悲しいかもしれない」(6: 20代男性) と、悲しみの大きさを強調する語りがある。

第四のシンボルマークは、【モノ化する悲しみ：猫が遺体・遺骨となっていく過程を観察するのは、辛く悲しい】というものである。細かくみると、＜(B013) 猫が臨終の際、苦しみ、冷たくなり、小さな遺骨となっていくのがつらすぎる＞という表札、＜(B007) 野良猫や外飼猫は庭などに埋葬し、都会ではペット葬儀屋に依頼する＞という表札、＜(A030)

死後硬直し、猫の死体がモノになっていく過程を観察した>という表札からなる。

(B013) は、猫の臨終時に人間が感じる感情の移り変わりを表す表札である。具体的には、「(81) (飼い猫を看取るとき) だんだん動きが鈍くなったりご飯を食べなくなったりするのを見るのは心にきそうだな」(28:20代男性)、「(4) やっぱりに目に生気が失われていくっていうか、みずみずしくなくなっていく、しぼんでいって干からびていくっていうか、言い方難しいんですけど。っていう感じで死んでいくので。だから猫が死ぬときって、こういうふうに死ぬんだって、すごい思った。」(4:30代男性)、「(3) 亡くなる時も、「お水を最後にちょうだい」、「はあ。もうこれでさようならだね」という感じが伝わってくるの。だからやっぱり、言葉を出せないけど、いろんなことを目とか態度で表現してくれるかなって」(3:50代女性) など、臨終時に猫が衰弱するのを見る悲しみが語られる。

(B007) は、葬儀時の経験に関する表札である。具体的には、「(25) 火葬場に行くまではみっけ(筆者注: 猫の名) がまだ、まだ死んでないんじゃないかなっていうのはすごい思ったよ。で火葬場で焼いて。骨になった時には、やっぱりもう戻らないじゃん。絶対。もう戻らないから、そのときは、これがあの頑張って病氣と闘ってきたみっけなんだって。ずいぶんちっちゃくなっちゃったなーと思って。またそれで帰って。しばらくは家に居るときはもう何だろう? その箱に入ってる骨になっちゃったみっけとは会話してたよ」(11:30代男性)、「(30) (Q: 親戚のところの猫は、庭に埋めて、その骨だけ出して。それは、どういうふうに。箱とかに入れて保存してるみたいなの。わかんないけど、ペット用の、そういう入れる箱もあって。田舎の家だから、お仏壇と一緒に置いてある。猫のお骨も」(12:30代男性) など、火葬して遺骨になったものに言及する語りである。

(A030) は、猫の死後、生物からモノに変化する感覚を表す表札である。具体的には、「(66) 私3歳とか4歳とかめっちゃちっちゃかったからはっきりは覚えてないけど、丸まって死んでたんやけど、死後硬直で固くなって、あんま実感が湧かへんっていうか、生き物がぬいぐるみになったような感じ」(40:20代女性)、「(24) 保冷剤で冷やして、きれいにして箱に入れて。本当に綺麗にしたんだけど、写真とか上がってるかなあと思うんだけど、すごい綺麗にみっけを入れて、でもみっけを俺は死んだ直後から触ってたから。全く汚れてないんだよ。すごい綺麗だし真っ白なもともと綺麗な猫だから。生きてるみたいなんだよね、すごい。なんだろうね。死後、硬直してって硬くなってって、触ると筋肉は硬いんだけど、どこを触っても撫でてきたみっけだから」(11:

30代男性) など、猫が死後硬直する時に感じた思いに言及する語りがある。

第五のシンボルマークは、【自然に還る死: 猫は死に際、身を隠すので看取ることができないまま、自然に還る】というものである。これは、<(B001) 猫は死期が近づくと行方不明になることがあり、看取ることができないと、喪失感を抱く>という表札からなる。具体的には、「(2) 猫って死期が近いと出て行っちゃうの。以前飼っていた猫が冬に急にいなくなって、どうしたんだろうと思っていたら、春になって縁の下から出てきたということがあった」(3:50代女性) と死期に行方不明になり、あとでみつかったという語り、「(54) 看取った場合だと表情も見られるし、ちゃんと亡くなったことが確認できるから諦めがつくけど、いなくなる場合は想像しかできないから尾を引く喪失感になりそうですね。スパッと終わりが無いというのが一番の違いかな。正直な気持ちとしては看取りたいですね。猫がどう思っているのかは知らないけどいなくなるのでほしいですね」(28:20代男性) など、看取れない場合の喪失感に言及する語りがある。

第六のシンボルマークは、【消えない悲嘆: 猫の死の辛さ・悲しさは克服困難であり、悲嘆は消えず、後悔の念にもかられる】というものである。細かくみると、<(B002) 猫とは一日でも長く過ごしたく、猫の死のショックと悲しみを和らげる方法はなく、仕事や生活に支障をきたす>という表札と、<(B003) 自分が飼わなければ、猫はもっと幸せに長生きできたのではないかと、悔悟の念をいだく>という表札からなる。

(B002) は、猫の死のショックが緩和されず、日常生活に支障をきたすことを示す表札である。具体的には、「(39) (猫が亡くなったら) 家から出られなくなりそう。猫に何かあったらどうしようって不安で、家出るときもガス栓しめたり、誤飲しそうなもの片付けたりとか。ずっと猫と一緒にいたいくらい、何かあったら嫌だなんていう気持ちがすごい強くて。だから死んだら本当にショックだと思う」(22:20代女性) と死亡時の衝撃に言及する語り、「(74) 悲しんだし、いなくなって、どういう風に生活すればいいかわかんないぐらいだったな」(11:30代男性) と、猫の死亡後の自分の生活に対する不安・困惑に言及する語りがある。

(B003) は、猫の生前との関わり方に関する後悔を示す表札である。具体的には、「(61) 猫は餌の管理もあるし、もっといいもんを食べさせてあげるとか、そういうふうになってしまう。もっとお金持ちの家に生まれたらよかったとか」(37:30代女性) と、他の人に飼われたほうがよかったかもしれないという語り、「(37) 1代目の子の話だけど、なんかちょっとやっぱ申し訳ないなと思ったね。拾ってから1ヶ

月とか、そういうぐらいだったから。もともと結構衰弱した状態で拾ってきたから、最初はあんまご飯とかも食べられなくて。なんかね、拾ってきてそれで、うちでなんかいろいろして、それですぐ亡くなっちゃったって考えると、なんかもうちょっと、もうちょっと何かいろいろ調べてケアできたんじゃないかなあ。あんまりこういうこと、拾ってきてみたいなことをするべきじゃなかったのかなあとか。色々含めて申し訳ないなあとはちょっと思ったね」と、もっとよいケアができたのではないかという後悔に言及する語りがある（16：20代男性）。

第七のシンボルマークは【悔いなき看取りと死の受容：天寿を全うすべく、悔いなき看取りを行い、死を受け入れ、他の猫と暮らし始める】というものである。細かくみると、＜(B011) 猫の寿命は伸びており、晩年の世話や介護にお金がかかってもよいので、1日でも長生きしてほしい＞、＜(B012) 猫が晩年の世話や介護を精一杯行ったので、最高の看取りができたし、楽しかった時間は消えない＞、＜(B006) 猫の死は悲しいが、他の猫を飼ったり、新しい猫に愛情を注ぐ＞という表札からなる。

(B011) は、猫の長寿化によりケアの時間が長期化するという表札である。具体的には「(40) 寿命分ちゃんと、事故とか病気とかじゃなくて、老衰で死ぬるように、全うできるようにするのが責任だなんて思うから、ちゃんとお世話しようって思います」(22：20代女性)と、老衰死を目標とする語り、「(44) 知り合いの人の老犬がどんどん病気になって治療が必要だからものすごくお金がかかるって言いながらも、おろおろしながらお世話しているのを見て、経済的負担もたいへんだなと思ったけど、いくらかかってもいいから1日でも長く生きて欲しいと思う気持ちもわかります」(25：40代女性)」と経済的負担を厭わないという語りがある。

(B012) は、猫のケアを精一杯行なったので、最高の看取

りができ、生前の思い出は消えないという表札である。具体的には、「(23) 3ヶ月間病院に通い続けた俺からしたら、これほどまでに理想的な死には方はないと思ったんだよね。家族と一緒に静かに。痛かったかもしれないし、苦しかったかもしれないけど。この時間は少なかったと思うし。俺はあの瞬間は最高の看取り方ができたな。と思った」(11：30代男性)と最高の看取りに言及する語り、「(58) 愛情が深い分、失った悲しみは大きいけど、ネコちゃん達と出会わないで喜びも悲しみもない人生と、ネコちゃん達と出会う人生、どちらを選ぶかといえば絶対に後者だし、悲しみは愛情の証拠だと思って耐えようと思う。楽しい時間は失われない」(34：20代女性)と、猫と出会った時間と人生は失われないという語りがある。

(B006) は、悲しみを乗り越えて、新しい猫に愛情を注ぐという表札である。具体的には、「(14) 新しい猫を飼うとか(笑)。そういったことを猫に求めていくのはあれですけど。よくないと思うんですけど。場合によっては猫を新しく飼って、その新しい猫に愛情を注ぎながら、飼っていた猫との思い出をこう思い出するような感じになるかもしれないですね」(6：20代男性)と、飼っていた猫の思い出とともに新しい猫に愛情を注ぐという語り、「(45) もし、本当に飼えるんだったら死んだ時にもう一匹いないと完全にそこから猫が居なくなったら耐えられないと思うので…もしも飼えたら時間差でもう一匹買っというて、相方は死んじゃったね、って言いながらももう一匹の猫と悲しみを分かち合わないと、精神的に無理かも」(25：40代女性)と、複数飼えば悲しみが緩和できるという語りがある。

2) 7つのシンボルマークの空間配置と叙述化

以下の7つのシンボルマークの空間配置図を図1に示した。

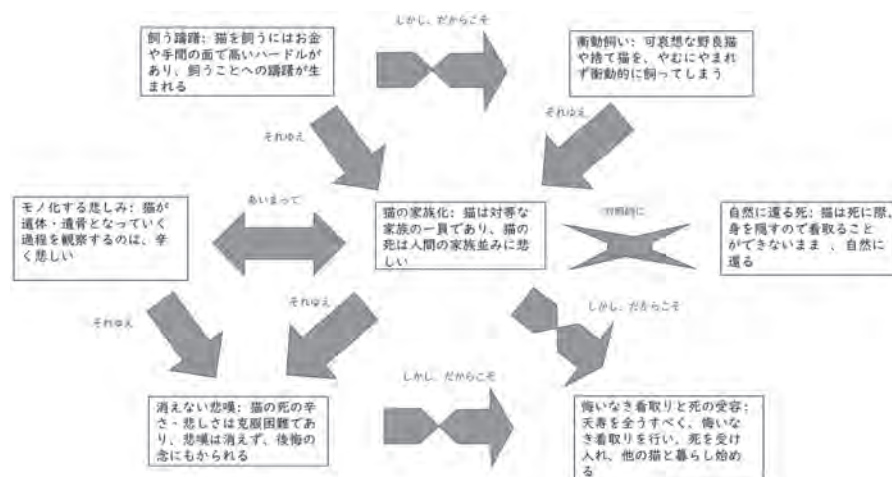


図1 猫を看取る体験の図解化

これをもとに、シンボルマーク間の論理的な関係を文章として表現する叙述化を行なった。なお空間配置の見取り図と叙述化の文章は第一著者が作成し、その妥当性について他の著者と複数回にわたり検証・確認した。

まず、猫を飼うにはお金や手間の面で高いハードルがあり、飼うことへの躊躇が生まれる【飼う躊躇】。しかし、だからこそ、可哀想な野良猫や捨て猫を、やむにやまれず衝動的に飼ってしまう【衝動飼い】。

【飼う躊躇】と【衝動飼い】は、猫を飼う以前の体験として対極的な面がある。しかしどちらも、その要素があるがゆえに、いったん飼ったあとは猫は対等な家族の一員であり、猫の死は人間の家族並みに悲しいことになる【猫の家族化】。【猫の家族化】にあいまって、猫が遺体・遺骨となっていく過程を観察するのは、辛く悲しいという感情が生じる【モノ化する悲しみ】。上記の過程とは対照的に、猫は死に際、身を隠すので看取ることができないまま、自然に還るという状態が生じることもある【自然に還る死】。

他方で、【モノ化する悲しみ】と【猫の家族化】があるがゆえに、猫の死の辛さ・悲しさは克服困難であり、悲嘆は消えず、後悔の念にもかられる状態が生じる【消えない悲嘆】。しかし、【猫の家族化】と【消えない悲嘆】が存在するにも関わらず、それを乗り越えて、天寿を全うすべく、悔いなき看取りを行い、死を受け入れ、他の猫と暮らし始める場合もある【悔いなき看取りと死の受容】。

■ 4. 考察

1) 人間の看取りとの共通性

このように構造的に把握された猫を看取る経験について、以下の特徴を指摘できる。

第一に、猫を看取る体験には、人間が人間を看取る体験と共通する部分が少なからず存在する。とくに看取る経験の前段階として登場する【飼う躊躇】は、人間が人間と家族として新しい関係を築く（結婚や出産などの）経験にも共有されると考えられる。たとえばコロナ禍で死生観が変化し、生き物の命を預かる責任の重さを感じて、飼うことに踏み切れないと語った 40 代の男性は、結婚に関しても、「(75) たぶん猫との別れとも共通するのかもしれないですけども、失ったときの寂しさとか辛さの感情が…。そのことを考えると、なかなか（筆者注：結婚することは考えられない）」（15: 40 代男性）と語っている。別れの寂しさ・つらさを思うと、結婚に踏み切れないという。これは「つながりへの躊躇」と呼ぶことができるような心情であろう。

また Kenney や Ambros によれば、ペットの意味は家族

の一員や精神的伴侶へと変化しており [14, 15]、【猫の家族化】に伴い、猫の死は、人間の子ども、父母、祖父母が亡くなったときと同じように悲しく、死別後に生じる悲嘆はなかなか消えない。これも人間の看取りにも同様に当てはまるものであろう。特に小林・守山 [2] が指摘する「予期悲嘆」や「看取りがもたらした情緒体験」は猫の看取りにおいても同様に経験されており、人間の看取りとの共通性を指摘できる。

2) 猫の看取りの独自性

にもかかわらず、第二に、猫を看取る経験には、現代の人間が人間を看取る体験では多く経験できないような独自の位相がある。たとえば【自然に還る死】では、猫は死に際に身を隠すので、外飼い猫や野良猫の場合、人間が猫の死を看取り、確認する経験が欠如することがありうる。厚生労働省「人口動態統計」によれば、人間の死亡場所は病院・診療所が 67.4%、自宅が 17.2%、介護施設等が 13.5% であり [17]、人間が人間の死亡を確認する割合は 98% 以上を占める。この中には日本の失踪者約 8.5 万人（2022 年）の数は含まれていないが、それでもほとんどの人間の死は、他の人間によって確認されている。これに対して猫の場合、「どうしたんだろうと思っていたら、春になって縁の下から出てきたということがあった」（3: 50 代女性）というような、人間に看取られない死は、現在でも生じている。現代社会における人間の死は病院化・自宅化されて確認・管理されており、他の同伴動物に関しても、失踪や逃亡が頻繁でないとなれば、【自然に還る死】は猫に看取りに固有の経験といえる。

他方で、猫の臨終期にしばしば感受される【モノ化する悲しみ】、すなわち生物からモノに変化するという感覚は、猫の看取りにある程度、特徴的な経験かもしれない。たとえば「死後硬直で固くなって、あんま実感が湧かへんっていうか、生き物がぬいぐるみになったような感じ」と語る 20 代女性、あるいは「死んだ直後から触ってたから。全く汚れてないんだよ。すごい綺麗だし真っ白なもともと綺麗な猫だから。生きてるみたいなんだよね」と語る 30 代男性は、死後硬直により変化する様子を仔細に観察している。【モノ化する悲しみ】は、人間でも猫以外のペットでも生じうるが、猫に関しては、獣医師や看護師から、臨終時に自宅での看取りを勧められたというエピソードをしばしば見聞する。猫の飼育頭数が増えるに従い、温かく、柔らかかった猫が、固く冷たいモノに変化していく様子を、人間が観察する経験も増えていくと予想される。

さらに人間の看取りと比較したとき、猫を看取る当事者にアドバイスや援助を提供する専門家の存在は、調査対象者の間ではほとんど意識されていなかった。序論でみたように、

人間の看取りに関しては、介護老人保健施設の看護職員、熟練看護師が感じる困難や、患者とその家族に対する意思決定支援などが論じられている [2-5]。これに対して猫を看取る経験では、悲嘆や苦しみをケアしてくれる職業的専門家は、今回のインタビューの語りの中にほとんど登場しなかった。もちろん現実には、動物病院の医師や看護師による実質的なグリーフケアが実施されているケースはあるにちがいないが、それは依然として一般的とはいえない。しかし、今後その重要性はますます高まると予想される。たとえば新島典子は、「愛玩動物看護師が死後のケアまで念頭に置いてペットロスの予防に必要な情報を伝えていけば、飼い主さんはペットロスに備えながら後悔の少ない看取りが可能になります」として、動物医療グリーフケアを提唱している [13]。そのような観点からの研究が今後、望まれるし、動物医療グリーフケアが普及した暁には、看取り当事者と専門家の社会的相互作用に関する研究を展開する余地も開けてこよう。

3) 消えない悲嘆から、悔いなき看取りと死の受容への移行

第三に、【消えない悲嘆】すなわち「猫ロス」の状態から、【悔いなき看取りと死の受容】への移行、すなわち猫ロスからの「回復」が、いかにして生じるのか、また生じるべきなのか、さらに望ましい「回復」とはいかなるものかについて、さらなる分析と検討が必要である。人間の場合、恋人や配偶者との別れ（失恋・離別）や、大切な人との死別からの立ち直りは、文学、映画、テレビドラマ、音楽などでは古典的なテーマであるが、猫と人間の関係においても今後重要なテーマとなるだろう。新島は「動物医療グリーフケア」の実践として、なくなったペットの抜け毛を使った抜け毛アートを作る、生前の写真を整理する、手紙を書く、なくなったペットを主人公にした物語を作る、生前のエピソードを集める、他の人のペットロス経験を傾聴する、新たな趣味に費やす、次の動物を迎えて再び飼い主になるなどの行動を提唱している [13]。再び飼い主になることに関しては、「新たに迎え入れる別の個性を尊重するために」、他の動物の「代わり」にしたり「比較」しないこと、別の種類から選び、別の名前で呼ぶことなどを推奨している。ペットロスという現象に長年向き合ってきた社会学者による、傾聴に値する提言である。

■ 5. 結論

猫に関心をもつ人 48 名のインタビューデータを質的統合法により分析した結果、猫を看取る経験は、【飼う躊躇】、【衝動飼い】、【猫の家族化】、【モノ化する悲しみ】、【自然に還る死】、【消えない悲嘆】、【悔いなき看取りと死の受容】という

7 種類のシンボルマークに整理できた。このうち【飼う躊躇】や【猫の家族化】は、人間や他のペットを看取る際にも共通する要素であり、【自然に還る死】は猫の看取りに固有の経験、【モノ化する悲しみ】は猫を含めたペットの看取りに固有の経験ではないかと考察した。また【消えない悲嘆】が【悔いなき看取りと死の受容】に転化する条件として「動物医療グリーフケア」における「新たに迎え入れる別の個性を尊重する」という原則が重要であると考察した。

本研究の限界としては、調査対象者の社会的属性を限定しておらず、性別、年代、居住地、猫の飼育や看取り経験の有無などにより、語られる内容が変わる可能性を十分に検討できていない可能性がある。さらなる課題として、インタビューや Web の自由回答を使って調査対象者を拡張することにより、7 種類のシンボルマークの有効性を確認するとともに、新たな分類が可能かどうかを検証したのち、ここで得られた結果から、大規模な質問紙調査に利用可能な質問項目を作成し、調査対象者の社会的属性に応じてこれらの見解に違いがみられるかどうかを検証したい。

■ 謝辞

本研究にあたり、ご多忙のなか調査にご協力くださり、貴重な体験を語ってくださった 48 名の調査対象者の皆さま、さらにインタビューの実査を担当した 36 名の東京大学の大学院生・学部生（当時）の皆さまに心よりお礼申し上げます。

本研究、特に分析に関しては、2022 年 6 月から文部科学省科学研究費・挑戦的研究（萌芽）「猫と人間の関係を分析する猫社会学の理論と方法の開拓」（課題番号：22K18550）の一環として実施されている。本論文の一部は、2023 年 3 月 11 日、第 29 回ヒトと動物の関係学会学術大会（東洋大学白山キャンパス）で発表された。

■ 引用文献

1. 一般社団法人ペットフード協会．令和 5 年全国犬猫飼育実態調査：主要指標サマリー．2024, <https://petfood.or.jp/data/chart2023/3.pdf>, 2024 年 2 月 7 日検索．
2. 小林裕美, 森山美知子．在宅で親や配偶者の看取りを行う介護者の情緒体験と予期悲嘆．日本看護科学会誌；2010: 30 (4)：6-16.
3. 丸山純子, 太湯好子．介護老人保健施設の看護職者がターミナルケアを実践するうえでの困難さとその構造．日本看護研究学会雑誌；2018: 41 (2)：159-170.

4. 林弥江, 正木治恵, 桑田美代子, 吉岡佐知子, 西山みどり, 石井優香, 坂井さゆり. 高齢者の臨死期における看取りケア: 熟練看護師のナラティブから. 千葉大学大学院看護学研究科紀要; 2019: 41: 25-34.
5. 矢野真理, 小林裕美. 急性期病院の熟練看護師が行うエンド・オブ・ライフケアにおける超高齢者の療養場所選択についての意思決定支援の構造. 日本看護科学会誌; 2021: 41: 431-440.
6. Johnson CL, Patterson-Kane E, Lamison A, Noyes H. Elements of and factors important in veterinary hospice. Journal of the American Veterinary Medical Association; 2011: 238 (2) : 148-50.
7. Shanan A. A veterinarian's role in helping pet owners with decision making. The Veterinary Clinics of North America Small Animal Practice; 2011: 41 (3) : 635-46.
8. Pierce J. Understanding animal suicide and death can lead to better end-of-life care. Animal Sentience; 2017: 20 (6) : 1-3.
9. Pierce J. The Animal as Patient: Ethology and End-of-Life Care. The Veterinary clinics of North America: Small animal practice 1; 2019: 49 (3) : 417-429.
10. 二階堂千絵, 安藤孝敏, 梶原葉月. 日本におけるペットロス研究の動向と展望. 横浜国立大学教育学部紀要. Ⅲ, 社会科学; 2019: 2: 11-22.
11. 新島典子. ペット喪失体験 (ペットロス) はなぜこんなにつらいのか -- リアリティ分離・封殺とペット喪失者のつらさの強化について. 現代社会理論研究; 2001: 11: 225-238.
12. 新島典子. 喪失 (Loss) からの「回復」にみる喪失対象の代替可能性. ソシオロギス; 2004: 28: 48-62.
13. 新島典子. ペットロスに備える. 動物看護; 2023: 35 (9) : 31-36.
14. Kenney, E. Pet funerals and animal graves in Japan. Mortality; 2007: 9: 42-60.
15. Ambros, B. Vengeful spirits or loving spiritual companions? Changing views of animal spirits in contemporary Japan. Asian Ethnology; 2010: 69 (1) : 35-67.
16. 山浦晴男. 質的統合法入門. 東京: 医学書院; 2012.
17. 厚生労働省 老健局. 医療・介護連携、人生の最終段階の医療・介護 (地域包括ケアシステムの深化・推進). 2023, <https://www.mhlw.go.jp/content/12300000/001140076.pdf>, 2024年2月18日検索.